

魯迅「一覚」をめぐる考察

佐藤 普美子

一 はじめに

魯迅の孤独と懷疑がさまざまな形をとって独特の陰影を成す『野草』の中にあつて、最終篇「一覚」⁽¹⁾はいささか異質な一篇といえる。それは同篇が『野草』の根幹となる作品群——「秋夜」、「影的告别」、「復讐」、「希望」、「过客」及び「死火」以下〈夢系列〉七篇——に見られるような象徴的手法をほとんど用いず、実際に身边整理をする中で生じた作者の心情を随想風に語っているからである。⁽²⁾しかし、爆撃に飛来する飛行機に「死」の襲来を目の当りにする「ような「緊張」を覚え、同時に『生』の存在をも切実に感じ取った」作者が、青年たちへの愛情を無防備なまでにさらけ出す次の言葉にはそれまでにない詩的緊迫感が漲っている。

ああ、しかし彼らは苦悩し、うめき、怒り、そしてついに粗暴になった。わたしの愛する青年たちよ。／
魂は風砂に打たれて粗暴になった。なぜならそれは人間の魂だから。わたしはそのような魂を愛する。わたしは無形無色の鮮血したたる粗暴に口づけしたい。……／そうだ。青年の魂はわたしの目の前に屹立する。彼らはすでに粗暴になり、あるいはまさに粗暴になろうとしている。しかし、血を流し、痛みに耐えている。

その魂をわたしは愛する。なぜなら、それはわたしに人間世界に居ること、人間世界に生きて居ることを気づかせてくれるから。

同篇はこの二日前に書かれた「淡淡的血痕中」と共に、流血の三・一八事件直後の緊迫した状況の下、自らの身に危険の迫る避難生活の中で生まれた。竹内好はこの二篇について「三・一八事件の打撃で、イメージの構築からはみ出し、なまの現実感の方に逸脱する傾きが出ていて、完美の点には欠けるかもしれない⁽³⁾と評するが、むしろ「逸脱する」がゆえに詩的緊張感をはらむこのくだりは、一見「随想風」な同篇の、実は核になる「思想」を成す部分とも考えられる。ここには、それまで書き継いできた『野草』の諸篇に見えるような自己意識の揺れと精神の格闘からくる詩的迫真力とは異なる、ある種の決断にも似た「精神的飛躍」が認められることに注目したい。⁽⁴⁾

さて必ずしも熟した語とはいえない「一覚」という題名だが、中国の『野草』研究では李何林をはじめ、ほとんどがこれを「目覚め」（「驚覚」あるいは「醒覚」）の意と解し、「yijue」と読んで居る。一方、日本では初めは改造社版『大魯迅全集』（一九三六年）で「目覚め」と訳された（訳者は鹿地亘。編集には胡風が協力した）が、竹内好が「まどろみ」と訳して以来、近年はこの訳が定着している。⁽⁶⁾この点については丸尾常喜『魯迅「野草」の研究⁽⁷⁾』が「一覚」の注釈の中で、題名の解釈をめぐる日中での相違を詳細に紹介している。その上で氏は、主として『漢語大詞典』が見出し項として掲げる「一覚」（yijiao）の用例をふまえ「まどろみ」の方を取っている。そもそも「覚」という文字は「眠り」と「目覚め」の両義を含むものだが、⁽⁸⁾日中の解釈の相違は、「一覚」という題と符合する内容を一篇のどこに求めるかの違いから来ている。直接的には同篇最終段の「……わたしは疲れ、煙草をつまみ、名のない想念の中で静かに目を閉じ、長い夢を見た。はっとして目覚めると、身外はなおも暮色が

取り巻いている。……」の中の「長い夢を見た」（間のひと眠り）と「はっとして目覚める」のいずれに重きをおくかで、「一覚」の解釈が分かれることになる。⁽⁹⁾

筆者は「まどろみ」という訳語に当初は多少の違和感を抱いたものの、その後は最終段の醸し出す朦朧とした雰囲気にふさわしいこの訳語になじんできた。しかし、中国の『野草』研究のほとんどが「一覚」を「目覚め・覚醒」の意と解していること、⁽¹⁰⁾さらに同篇の中で言及される雑誌『沈鐘』の同人馮至⁽¹¹⁾による『十四行集』第一篇（魯迅「一覚」をモチーフにしたソネット）と詩人呂劍による同名の詩「一覚」⁽¹²⁾でも、この語は基本的に「覚める」意に用いられていることから、今回改めて同篇を読み直す必要を感じた。本稿は『野草』最後尾に位置する「一覚」について、新たな視点から考察を加え、同篇が魯迅の北京時代における「精神的飛躍」を内にはらんだ一篇であることを確認し、あわせて竹内好が訳して以来、もはや定着した感のある「まどろみ」という訳語ではそれを十分表しきれないのではないかという疑問を提起するものである。

二 馮至の「十四行詩」第一首と呂劍の「一覚」

馮至『十四行集』の第一一首は魯迅に捧げられた一首である。初版（桂林明日社、一九四二年五月）には「一覚」の語に引用符がないが、再版（上海文化生活出版社、一九四九年一月）では引用符が付された上、巻末の「附註」（十四行第十一首）に「魯迅の『野草』の中に『一覚』という一篇がある」と明記される。初版と再版には詩句に多少の異同が認められるが、ここでは入手しにくい初版のテキストを示しておく（傍点は筆者）。

一一

一一

何年も前のある深夜

在許多年前的一個深夜

あなたは幾人かの青年にはつと感じた。

你為幾個青年感到一覺、

あなたはどれだけの幻滅を味わったかしれない、

你不知經驗過多少幻滅、

だがあの覚りは永遠に萎えたことはない。

但那一覺、却永不會凋謝。

わたしはいつまでも感謝の思いを抱きつつ

我永久抱着感謝的深情

あなたを望む、わたしたちの時代のために。

望着你、為了我們的時代。

それは愚かな人々に破壊され、

牠被些愚蠢的人們毀壞、

だがそれを守ろうとする人は一生

但是牠的維護人却一生

この世界から締め出された——

被摒擠在這個世界以外——

あなたは幾度か一筋の光を見出したが、

有幾次望出來一線光明、

振り向けばまたも暗雲が覆い隠す。

轉過頭來又有烏雲遮蓋。

あなたは険しい道のりを歩きつくした、

你走完你的艱難的行程、

苦難のなかでただ道端の小さな草だけが

艱苦中只有路旁的小草

嘗てあなたの希望の微笑を引き出した。

曾經引出你希望的微笑。

まず発音上の問題について言えば、このソネットは形式上、前半二連（ソネット形式のオクターヴ）の脚韻構
造が抱韻（abba / cddc）を構成するため、第二行句末「一覺」の語は「yi jue」と読むことがわかる。さらに字義

上、第一連で「一覚」を、魯迅が青年たちに「感じ取り」、「永遠に萎えたことはない」ものとしている以上、「目覚め」(ここでは「二筋の光」にも似た認識)であつても「眠り||まどろみ」ではないことがわかる。⁽¹⁴⁾ところで、馮至の『十四行集』は四〇年代抗戦期詩歌の中にあつて際立った哲理性を示す新詩の經典として近年再評価が著しいが、陳思和は同首について「馮至の筆になる魯迅は追放された反抗する知識人の典型であり、絶望の中で戦う精神の境界の肖像でもある」と述べている。⁽¹⁵⁾第二連以下に見えるように、馮至が見つめているのは確かに革命の闘士魯迅ではなく、その一生の大半を幻滅と蹉跎の中に送らざるをえなかつた文学者魯迅とその内面の寂寞である。艱難辛苦の人生の中で出会つた、懸命に生きる「小さな草」(かつての馮至のような青年たち)に「一筋の光」||「希望」を見出すと同時に、彼らをとりまく「暗雲」||現実をも認識したその瞬間にこそ生命の意義を感じた魯迅を、馮至は感謝の念と共に想起し、「一覚」の認識を共有した一首であるともみなすことができよう。「この世界から締め出された」という一行に馮至の魯迅理解の深さがうかがわれる。

次に呂劍(一九一九)の文革終息後に書かれた「一覚」と題する詩を掲げる。

一覚

深淵に臨む絶壁に窮した時、

わたしは嘗て死を思つた。

寒夜の耐え難い軟禁に苦しんだ時、

わたしは嘗て死を思つた。

当厄於下臨深淵的絶壁、

我曾想到死亡；

当苦於寒夜難耐的幽禁、

我曾想到死亡。

わたしが嘗て望んだのはわたしの声が、

我曾企望我的声音、

無形の中に消えて声を無くすことだった。

無形中消失於無聲；

わたしが嘗て望んだのはわたしの身体が、

我曾經企望我的形骸、

無声の中に消えて形を無くすことだった。

無声中消失於無形。

だが荒れ果てた広野に花があると気づいた時、

但当發現荒漠的大野有了花、

わたしは風をはらむ生の帆をあらたに広げた。

我重新鼓起了生之風帆；

だが絶望した目の中に涙があると気づいた時、

但發現無望的眼中有了泪、

わたしは風をはらむ生の帆をあらたに広げた。

我重新鼓起了生之風帆。

わたしは祈る、ちゃんと育った花々が、

我祈求能有長好的花、

傷のいまだ癒えないあの山々を覆うことを。

覆被那些瘡痍未平的山；

わたしは祈る、涸れない涙が、

我祈求能有不竭的泪、

乾きひび割れたあれらの心を潤すことを。

滋潤那些乾渴焦裂的心。

この詩は文革終息後に書かれたもので、魯迅の「一覚」を踏まえたものだと特に明記されてはいない。しかし、少なくとも第三連の「当發現……／我重新……」の繰り返し構造が端的に示すように、「精神上の転換」が「一覚」という詩題の根拠になっていることがわかる。荒野に咲く花や絶望した人々の涙、そうした逆境の中でもなおひたむきに生きる存在に「わたし」が「気づいた時」にこそ、「嘗て」絶望していた「わたし」自身が「生の帆をあらたに広げる」＝新たな行為を起こし再生するという認識が示されているからである。詩題の「一覚」はこ

こでも新たな認識と行為の決断が同時に訪れる。「はっと覚る」瞬間を表した語として使われていることが確認できる。

三 〈瞬間〉の把握

近年の中国における『野草』研究の成果を代表する、孫玉石『現実的与哲学的』⁽¹⁶⁾は「一覚」の核心となるテーマが「青年が問題に覚醒したことに対する新たな感覚と思考」だとしている。前に引いた同篇の最終段「……名のない想念の中で静かに目を閉じ、長い夢を見た。はっとして目覚めると、身外はなおも暮色を取り巻いている」の中の「はっとして目覚める（忽而驚覚）」という部分がこの一篇の題名の「本意」とも読めるが、題名自体は、目覚めて新たな「感悟」を得たという哲学的含意をも読み取れるとする。また「目覚め」でも、なお身外の暮色（暗黒の現実の象徴とする）は消えず、さらに果てしない戦いを必要とすることを認識したのだと強調するあたりは、李何林以来の多くの解釈と共通する点である。⁽¹⁷⁾むしろ同氏の見解で注目したいのは、前著『〈野草〉研究』（中国社会科学出版社、一九八二年六月）と同様、この一篇に絶望と希望をめぐるテーマと共に、青年たちの覚醒を目の当たりにした「喜悦」や「新たな感覚と思考」の到来を読み取っている点である。

さて、ここで「一覚」が直接指示する部分が「忽而驚覚」と考えた時、「忽而」は「忽然」「忽又」などとともに突然の意識や心理の転換を示すマーカーとして『野草』の諸篇に散見することに気づく。中でも重要な意味を担う例として、第一篇「過客」における次の部分を挙げておく。過客のせりふに挿入されているト書きの部分に注目したい（以下、傍点は筆者）。

○過客「歩きおおせるかどうかわからん?…（考えこみ、突然はっとして、「沈思、忽然驚起」）いけない。

わたしは行くしかありません。……」

○過客「なんと、あの声にかまわない……（考えこみ、突然はつとして、耳を傾ける「沈思、忽然、喫驚、傾聴着」）いや！やはり行かなくては。休んではいられない。……」

○過客「そう、休めば……（黙って考える。だが突然はつとして、耳を傾ける。「黙想、但忽然、驚醒、傾聴。」）いや、できない。わたしはやはり行かなければ。」

○過客「みなさん、ありがとうございます。どうかお元気で。（歩き回り、考えこみ、突然はつとして「徘徊、沈思、忽然、喫驚」）しかし、できない。わたしは行かないわけにはいかない。わたしはやはり行く方がいい……」

括弧内のト書きの部分はいずれも、過客が「沈思」「黙想」あるいは「徘徊」という行為を経て、ある決断——歩き続ける——に到る際の、何かを把握した特別な〈瞬間〉を表現している。その〈瞬間〉は「沈思」と「決断」をつなぐ最も凝縮された「生」の一断面、あるいは現実の認識が同時にある行為への決断となるような、まさにその人固有の〈時〉が立ち上がる〈瞬間〉であるといつてもよい。

「過客」以外にも一篇の中で重要な転換（精神上的の飛躍、新たな認識の到来）を表す部分に「忽而」「忽然」あるいはその類語が使用されている例は少なくない。例えば、「ギャーツと鳴いて、夜行の悪鳥が飛んで行く。／わたしは不意に（忽而）深夜の笑い声を聞きつける。」（「秋夜」）や「突如（忽而）、ある力がわたしの心の平安を突き破ったとたん、たくさんの夢が目の前に広がった。」（「死後」）、「空中に突然（突然）また別の巨大な波が起こり、前の波とぶつかりあい、旋回して渦を巻きながら、一切のものをわたしもろとも呑み込んだので、口も鼻も息ができない。」（「頽敗線の顫動」）などがあり、得体の知れない何かの不意に生起することで、風景が突如一変

する瞬間の感覚を鋭く捉えている。しかも「頹敗線的顫動」の、裸で荒野に立つ寡婦の異様な描写には、〈瞬間〉の意義、その哲理性が独特の詩的表現をとって凝縮されていることを見逃すわけにはいかない。

……その瞬間、一切の過去が照らし出された（於一刹那間照見過往的一切）。飢餓、苦痛、驚異、恥辱、歓喜、そして顫え。苦勞、つらい目、巻き添え、そして痙攣。殺つてしまえ、そして落ち着き。……次の瞬間、その一切を併せて、（又於一刹那間一切併合）眷恋と決裂、愛撫と復讐、養育と抹殺、祝福と呪詛……。女は両手を思いの限り天にさしのべた。……

魯迅が『野草』の中で対極的觀念の間をさまよい突き詰めながら新たな認識へ導かれていることは「影的告别」「希望」をはじめ「題辭」の顕著な特色であるが、対立項や過去の一切が交差する〈瞬間〉に生まれる生命意識＝実存の感覚を詩的形象に転化させた表現としてこの部分は『野草』中の圧巻だろう。また〈瞬間〉をめぐる思索としては、この時期の魯迅への影響がしばしば指摘されるニーチェ『ツアラトウストラ』の中の「永遠に相容れない」「ふたつの道」が「出合う」「瞬間という名の門」（第三部「幻影と謎」⁽¹⁸⁾）を想起させる。

ところで「一覚」の約半年後に書かれた「藤野先生」（『朝花夕拾』）の最終段は、「一覚」の最終段同様、書齋で煙草をくゆらす光景が描かれる。

いつも夜になって疲れが出、ひと休みしようかと思うとき、灯りの中の先生の浅黒い痩せ形の顔が、今にもあの抑揚のある口調で語り出しそうになるのをながめやると、わたしははつと良心に目覚め（使我忽又良心発現）、勇気が満ちてくるのを覚える。そこでやおらたばこに火をつけ、「正人君子」の輩の憎悪の的になる文章を書き続けるのである。

「藤野先生」では追慕の念が基調にあり、同じ書齋の光景でも「一覚」のような緊迫感はない。しかし「はつと

良心に目覚め」させるもの、その認識の瞬間をもたらす前提として全篇に藤野先生への深い敬愛の念がつづられていることは、「一覚」において何よりも青年たちへの愛が率直に宣言されていたことと重なる。魯迅の中で新たな認識をもたらす特別な〈瞬間〉の発生と、ある対象へ向けられた愛の自覚は不可分のものではないだろうか。⁽¹⁹⁾

因みに、「覚」ないし「自覚」という語は日本留学期に書かれた「文化偏至論」(一九〇七年)や「破悪声論」(一九〇八年)に魯迅の初期思想を支える重要な概念として現れることがしばしば指摘されている。⁽²⁰⁾ たえば前者には「…新生の文明が起れば……にわか覚醒して、客観的夢幻世界を脱し(成然以覚、⁽²¹⁾出客観夢幻之世界)、主観と自覚の生活がこれによつてますますひろがるであろうか。」という一節なども見える。「一覚」の「覚」の文字が魯迅の思想形成に関わるキーワードであることは間違いないが、この問題は稿を改め論じることにした。

四 〈屹立するもの〉のイメージ

「一覚」の二日前に書かれた「淡淡的血痕中」の中に現れる猛士は次のように描かれる。

叛逆の猛士が人間の世に現れる。彼は屹立して(屹立着)、一切の変わり果てた、また現にある廃墟と荒塚を洞察する。一切の広大な久遠の苦痛を記憶し、一切の堆積した凝血を正視し、一切の死者、生者、生まれようとする者、そしてまだ生まれない者たちを熟知する。彼は造化のからくりを見抜き、やがて造物主の良民たるこれら人類を蘇生あるいは絶滅させるべく立ち上がるうとする(将要起来)。

また、先に引用したように「一覚」において、魯迅がいささかもためらわず「そのような魂を愛する」と語った青年たちは次のように描かれていた。

……これら脂粉を塗りたくろうとしない青年たちの魂が次々とわたしの目の前に屹立した(依次屹立在我眼前)。

彼らはしなやかで美しく、そして純真だ——ああ、しかし彼らは苦悩し、うめき、怒り、そしてついに粗暴に
なった。わたしの愛する青年たちよ。／＼：そうだ。青年の魂はわたしの目の前に屹立する（屹立在眼前）。

これらに共通する「屹立するもの」のイメージは『野草』第一篇「秋夜」に現れる、「怪しく高い」空を「まっ
すぐに突き刺す」棗の木のイメージにも重なってくる。

そしてもっとも真直ぐで、もっとも長い数本の枝はすでに黙々と鉄のように、怪しく高い空をまっすぐに突
き刺し（直刺着）、そのため空はちかちかとうさんくさい瞬きをしている。空の丸い月をまっすぐに突き刺し
（直刺着）、そのため月は追いつめられて青ざめている。……だが何一つ持たない幹はやはり黙々と鉄のように、
怪しく高い空をひたすら突き刺している（直刺着）。さまざまに瞬いて人を惑わす多くの眼を意にも介さず、一
心にその死命を制そうとしている。

この他にも第五篇「復讐」の中で、全身裸で鋭い刃を握りしめ果てしない荒野に「干乾びるまで立ち続ける（乾
枯地立着）」男女や、第八篇「雪」の「果て知れぬ荒野の、りんりんと凍てつく天蓋の下、きらきらと渦巻き立ち
上る（旋転昇騰着）」「雨の精魂」である北方の雪、そして「一覚」の約七カ月後に書かれた「范愛農」（『朝花夕
拾』）で、菱の茂みから見つかった范の「直立していた（直立着）」水死体なども「屹立するもの」に関連したイ
メージとして想起される。しかし『野草』の中で最も強烈な印象を残すのは前節にも引いた第一六篇「頽敗線の
顛動」の中の、一人裸で荒野に立ち尽くす初老の寡婦のイメージであろう。

……頭上にはただ高い空があるだけで、虫一匹、鳥一羽飛んでいなかった。彼女は一糸まとわぬ姿で、石像の
ように荒野の中央に立ち尽くした（石像似的……站在荒野の中央）。その瞬間、一切の過去が照らし出された。飢餓、
苦痛、驚異、恥辱、歓喜、そして顛え。……次の瞬間、その一切を併せて、……女は両手を思いの限り天にさ

しのべた（拳両手盡量向天）。唇の間から人と獣の、人の世にない、そのため言葉にならない言葉が漏れた。

こうして言葉にならない呻き声を発した後、体中の皮膚の「魚鱗」や「荒海の波」のような顫えによってひたすら高い天と対峙する寡婦は「秋夜」の棗の木のもう一つの姿でもある。そして「秋夜」ではただ「夢見る」だけで「赤くこごえた」草花が、「二覚」では「砂漠の中で懸命に根をのぼし」それは「青年の魂」と重なって「目の前に屹立する」。この時「屹立する」精神において「わたし」と「青年」は限りなく近づく。このように『野草』に現れる〈屹立したものの〉のイメージは前節で述べた〈瞬間〉をいわば空間化したものではないだろうか。それは水平に流れ行く時間の中で、突如天に向かって切り立つように立ち現れる時間Ⅱ〈瞬間〉に与えられた詩的形象だと考えられる。

五 むすびに

『野草』の場面は第一篇「秋夜」で書齋に始まり、最終篇「一覚」でまた書齋へ戻る設定になっている。この意味で『野草』全体を「夢に入つて」から「夢を出る」までの一連の〈夢〉を描く散文詩とみなすことも可能かもしれない。⁽²²⁾そして「愛すべき」青年たちの様々な形で駆け抜けていく青春への思いが「感謝」と「悲しみ」を錯綜させつつ、ひと眠りの「夢」の中で去来し、「はっと目覚め」て、なお周囲は暮色に包まれていることを自覚するそのひととき、「粗暴になる」彼らへのいとおしさと悲しみをいよいよ確かなものにするこのひとときを「まどろみ」と呼ぶことはきわめて自然である。しかし、本稿の前二節で見てきたように、『野草』の所々に「忽然」「刹那」等がメーカーとなって新しい認識が不意に到来する表現が見られ、⁽²³⁾さらにその認識は〈屹立するもの〉たちのイメージとして空間化され、最後の一篇に結実している。また、そもそも同時代及び魯迅以降の中国の文

学者や研究者が「一覚」の語をどう受けとめてきたかということも無視できないだろう。これらの点から、「一覚」は名づけえぬ様々な思いを反芻した後、突如訪れる〈熟時〉とも言うべき時間Ⅱ〈瞬間〉をつかみとったことを表現すると思えられないだろうか。しかしそれは仮にニーチェの『ツアラトウストラ』に見える〈瞬間〉の把握に通じるものだとしても、いわゆる〈永劫回帰〉のような観念や思想に収斂する性質の形而上の認識ではない。生命意識を伴う認識、つまり対象への深い愛情と現実の虚妄の認識と行為への決断がほとんど一瞬のうちに感じ取れるような精神の営みである。魯迅はそれをあえて安定感を欠く、しかしダイナミズムをはらむ「一覚」という語に託したのではないだろうか。「まどろみ」という訳語では必ずしもこのテンションを反映しないと思う。

万事積極的であることに価値を置きがちな中国の魯迅理解が、魯迅を「覚醒」した「戦士」に収斂させる傾向を持つてきたのと対照的に、日本における魯迅理解はどちらかといえばその寂寞と闇の苦闘に寄り添うがゆえに「孤独者」「彷徨者」としての魯迅に精神の核を見ようとしてきたのかもしれない。とりわけ難解な『野草』の読解にはむしろその視点が不可欠であったともいえる。「目覚め」「覚醒」という語の、迷いやためらいがすすきりと取り除かれたような啓蒙的語感が当時の魯迅の内面となじまないと感じる研究者たちが、竹内好以降「一覚」を「yi jiao」（まどろみ）と解する方向にシフトしていったことはある意味で当然であろう。それは対象に肉薄しようとする文学研究にとっては不可避の、ある時にはむしろ必要なバイアスでもある。それでもなお、先に述べてきたことと考え合わせた時、「一覚」の語は「まどろみ」ではなく「はっと覚める」方向に理解する必要があると思う。さらに、この語に託された「精神的飛躍」は愛情と不可分に生起し、ある種の「美感」（救済の感覚）を伴う生命意識として魯迅の精神的抛り所でもあったことを思い描くべきではないだろうか。今、「一覚」に最もふさわしい訳語が見つからないまま、「はっと気づく」と訳しておくことにする。「三・一八」直後に書かれた『野草』

の最終二篇を「色あせた血痕の中で——はつと気づく」と連ねてみた時、北京時代に終焉を告げようとする魯迅の「精神的飛躍」をいくらか浮かび上がらせることができるかもしれない。

参考文献 ○張夢陽編『中国魯迅学通史』（広東教育出版社、二〇〇二年二月）（下巻）第十二章「『野草』 叢中探哲学——

『野草』学史」、同書（索引巻）「五、『野草』学史」○解志熙『生的執着——存在主義与中国現代文学』（人民文学出版社、一九九九年七月）○木山英雄「『野草』的形成の論理ならびに方法について——魯迅の詩と『哲学』の時代——」（『東洋文化研究所紀要』第三〇冊、一九六三年三月）○木山英雄・伝田章『言語文化研究Ⅱ 中国の言語と文化』（放送大学大学院教材、二〇〇二年三月）

*なお、『野草』等からの引用を訳出するにあたり、上掲書の木山英雄氏、以下の注（6）（7）（21）に掲げる飯倉照平氏、丸尾常喜氏、伊東昭雄氏の訳文を参照させていただいた。

注

（1）「二覚」は一九二六年四月十日に書かれ、「野草之二十三」として『語絲』第七五期（一九二六年四月一九日）に「淡淡的血痕中」（『野草之二十二—一九二六年四月八日』）と共に掲載された。同篇について魯迅は「飛行機が頭上で音を立てているのを聞いて、一年前北京城の上空を毎日旋回していた飛行機のことを思い出した。私はあるとき一篇の短文を書き、『二覚』と題した。今ではこの『二覚』さえなくなった」（『朝花夕拾』「小引」一九二七年五月一日）「奉天派と直隸派の軍閥戦争の際に、『二覚』を書いた。このあと私は北京に住めなくなった」（『野草』英文譯本序「一九三一年」と言及する。

（2）竹内好は『野草』について「『魯迅選集』（岩波書店、一九六四年改訂版）第一巻「解説」の中で「最後の二篇が、それ以前のファンタジーの世界から一步『雑感』のスタイルの方へ近づいている」と指摘する。

（3）竹内好訳『魯迅文集』（筑摩書房、一九七六年二月）第二巻「解説」第四〇三頁。

(4) 青山宏「まどろみ（一覚）について」（『魯迅研究』第二五号、一九六〇年）は「一覚」が他の作品と「違っている」外的契機は「三・一八」という現実的事件にあるとしても、内的要因は、第七篇「希望」では真の暗夜すらない「不明不暗」だったものが「一覚」では「暗夜に向う黄昏であること」の認識を得て、さらに失われていく形とはいえ「身外の青春」が見出されたことで一つの結論を得たことにあるとする。これも「一覚」に「精神的飛躍」を見る読み方である。

(5) 李何林『魯迅《野草》註解』（一九七五年十一月、修訂本）

(6) 『野草』の全訳として代表的な飯倉照平訳『魯迅全集』（学習研究社、一九八五年十一月）第三卷所収の「野草」、片山智行『魯迅「野草」全釈』（平凡社、一九九一年一月）の他、注（7）の丸尾常喜訳はいずれも「まどろみ」とする。

(7) 東京大学東洋文化研究所発行『魯迅「野草」の研究』（汲古書院、一九九七年三月）。

(8) この点については注（3）の竹内好「訳注」、学研版「野草」の飯倉照平「訳注」も言及する。

(9) 荀春生「魯迅の『一覚』の解釈と翻訳について」（九州大学『文学論輯』第三四号、一九八八年）は「一覚」を語義と語法の点から詳細に分析した上で「はっと目覚める」の意だとする。ただし、氏が提案する「たかぶる」「興奮する」という訳には賛成しない。また同論文によれば、北京外文出版社の英訳本（一九七四年）『野草』は「The Awakening」、独訳本（一九七八年）も同篇を「Das Erwachen（目覚め、覚醒）」と訳している。

(10) 近着の胡尹強『魯迅：為愛情作証——破解《野草》世紀之謎』（東方出版社、二〇〇四年十一月）は例外で、「一覚」は「睡了一覚（ひと眠り）」のことで「却不是睡、而是合了眼細細回味、咀嚼」つまり「まどろみ」の意に解している。

(11) 龔明德「『一覚』中『並不熟識的青年』是誰？」（『中国現代文学研究叢刊』二〇〇四年第二期）同論文は魯迅「一覚」に「面識のない青年」とあるのが、実際には陳煒諱のことであり、当時の魯迅日記や馮至の書信から見て、馮至ではないと断定する。一九八一年の一六卷本『魯迅全集』の該箇所注には「馮至を指す」とあったこと、また近年著された馮至の評伝類にも「一九二五年四月」の項に馮至が魯迅に『浅草』を手渡したとの記述があるのは誤りだと指摘する。

(12) 『呂劍詩存』『鳳鳥之夢』（一九七八〜一九八九）（人民文学出版社、一九九六年九月）所収。呂劍は本名王聘之、山東萊蕪の人。一九三八年頃から詩作を開始、抗戦期は昆明、香港で活動、四八年に華北の解放区へ入る。共和国成立後は『人民文学』『詩刊』の編集に当たる。五七年「右派」として批判され、文革中は下放。七九年名誉回復。詩集に『草芽』（上

海海燕書店、一九五〇年)、『喜歌与酒歌』(内蒙古人民出版社、一九七九年)等がある。

- (13) この他の異同は次の通り。「初版」↓「再版」で示すと、第二行「深夜」↓「黄昏」、第四行「但」↓「但是」、「凋謝」↓「消沈」、第八行「但是」↓「可是」、第九行「摒擠」↓「摒棄」、第一〇行「幾次望出来」↓「幾回望出」、第二二行「走完」↓「走完了」

- (14) 独文版『十四行集』(Wolfgang Kubin 訳 *Sonette, Inter Nationes Kunstpreis 1987*) は第一連の第二、四行の「一覚」を [Erleuchtung (突然の着想・悟り)] と訳す。

- (15) 陳思和『中国現当代文学名篇十五講』(北京大学出版社、二〇〇三年十二月) 第八講「探索世界性因素的典範之作：『十四行集』上」、第二二三頁～二三四頁。

- (16) 孫玉石『現实的与哲学的』(上海書店出版社、二〇〇一年九月)『魯迅研究月刊』(一九九六年第一期～第二期)の連載をまとめたもの。

- (17) その中で李国濤『《野草》芸術談』(山西人民出版社、一九八二年三月)が初めて「一覚」の語の典拠として杜牧「遣懷」の「十年一覚揚州夢」を示し、魯迅にとって「十年一覚北京夢」だったと指摘する。

- (18) 蘭田宗人訳『ニーチェ全集』第一巻「ツアラトウストラはこう語った」第三部(白水社、一九八二年一月)第二三二頁。

- (19) 銭理群・王得后「論魯迅的散文」(『魯迅散文全編』「前言」浙江文芸出版社、一九九一年一〇月——王晓明主編『二十世紀中国文学史論』(東方出版中心、一九九七年一〇月)所収)は、魯迅の散文独自のテーマが「愛」と「死」に関する体験と思考であり、社会に蔓延する愛の欠乏や生命の軽視への冷徹な分析が、「慈愛」と「悲愴」が表裏を成す魯迅の散文独特の味わいを生むと指摘する。

- (20) 高遠東「魯迅的可能性」(『魯迅研究月刊』二〇〇三年第七期)は、魯迅の「自覚」——人を主体化する方法——とは、理性に訴えるだけでなく、人の情感・意志・直観などの非理性的部分に作用するため、「個人」の「自立」すなわち「自覚」の過程はより多く啓示的、神秘的なものとなり、往々にして概念的論理ではなく、形象による詩的なものに表現され、それは主観的心理体験に基づき確かめられるとしている。

(21) 「にわか覚醒して」の原文「成然以覚」は「科学史教篇」（『墳』）にも見られ、出典は『莊子』「大宗師」篇の「成然寐、遽然覚」（安らかに眠り、にわかには目を覚ます）。しかし「文化偏至論」（学研版『魯迅全集』第一卷）の訳者伊東昭雄氏は「成然覚」では意味を成さないため、「遽然覚」と書くべくところを魯迅が誤記したのだろうとする。この点についてはさらなる検討が必要かもしれない。

(22) 例えば、黄科安「試論魯迅《野草》的梦境芸術」（『魯迅研究月刊』一九九五年第二期）は『野草』が系統的意識的に「夢幻描写を題材にした」作品であり、冒頭篇で「夢に入り」最終篇「一覚」に到ってようやく「はっと覚めた（忽而驚覚）」とすることで、首尾一貫した長い夢を作り上げているとする。

(23) 一九二五年一月から六月にかけて『野草』と平行して書かれた雑感文（『華蓋集』所収）のタイトルが「忽然想到」（一）と（二）であることも示唆的である。

〔補記〕本稿脱稿後、宮尾正樹氏より繆崇群（一九〇七—一九四五）に「一覚——空襲雜写」と題する四〇年代の散文があることを御教示いただいた。冒頭部分は次の通り。「這些偶然或是突然而來的一覚、它的振幅是相当的強烈。在那上面也許都會投過一抹死的黑影、消逝了的一霎、也正是我還在『生』的一覚。我記下它們、為着一覚也不遺忘！」ここでも「一覚」は「[je]」ははっと気づく、その一瞬を指していると考えられる。

（おとう ふみこ）